

日語普通體會話斷定句尾之教學研究 —自母語者和學習者的使用情況分析—

中村直孝

世新大學日本語文學系助理教授

摘要

從學習者使用普通體的會話中，常能觀察到許多不自然的斷定句尾（言い切り形）用法。但針對普通體會話的斷定句尾之相關研究很少，在教學上亦存在著困難。本研究試圖將普通體會話中的斷定句尾用法進行分類，並觀察母語者和學習者的使用狀況。結果顯示，「だ。」具有特殊性，學習者不自然使用的例子很多。此外，因為具模糊性，很難判別斷定句尾的使用是否自然。依據這些調查結果，筆者提出以下建議：

- ① 斷定句尾的基本功能說明是必須的。
- ② 在學習者的初學階段就應謹慎使用「だ。」的斷定句尾，中級以上，需注意不能將「だ。」的斷定句尾使用在回應對方的會話上，應採用「だ。」的其他用法。
- ③ 在教學上加強自說自話模式的表達方式。
- ④ 使用固定的表達方式，例如「(い)やだ。」、「ほんと(う)だ。」、「と思う。」。

關鍵詞：斷定句尾、普通體會話、語料庫、口語文法、模糊性

受理日期：2021年08月21日

通過日期：2021年10月29日

DOI:10.29758/TWRYJYSB.202112_(37).0003

A Study of Teaching of Predicative Forms in Plain Style Conversation: An Analysis of Native Speakers and Learners' Usage

Nakamura Naotaka

Assistant professor, Department Of Japanese Language And Literature,
Shih Hsin University

Abstract

In learners' plain style conversation, inappropriate uses were observed in the usage of predicative forms (言い切り形). Few studies researched in predicative forms in plain style conversation at present, and it is difficult to teach. This study attempted to classify the usage of the predicative forms and observed the use of them by native speakers and learners. The results show that "だ/da" is often used unnaturally by learners because of its peculiarity. It was difficult to judge whether the phrases were natural or not for native speakers because many of them were ambiguous. Based on these findings, the following recommendations were made.

1. It is necessary to explain the basic functions of predicative forms.
2. At the basic level, it is suggested not to use "だ(da)". And in the intermediate level and later, the other usages of "だ(da)" should be introduced, noting that it cannot be used for responding to others.
3. It is necessary to reinforce the teaching of monologue speech mode.
4. It is beneficial to teach fixed expressions such as "(い) やだ。 / (i)yada", "ほんと(う) だ。 /honto(o)da", and "と思う。 /to omou".

Keywords: Predicative Forms, Plain Style Conversation, Corpus, Spoken grammar, Peculiarity

普通体会話言い切り形の教授に関する一考察 —母語話者と学習者の使用状況の分析から—

中村直孝

世新大学日本語学科 助理教授

要旨

学習者の普通体会話を観察すると、言い切り形に不自然な使用が多く見られるが、普通体会話における言い切り形の研究は少なく、指導が難しいのが現状である。本研究では普通体会話における言い切り形について、その用法分類を試み、母語話者と学習者の使用状況を観察した。その結果、「だ。」は特殊性があり、学習者の不自然な使用が多い。また、言い切り形は曖昧なものが多く自然かどうか判定が難しいという特徴が見られた。こうした知見から、以下のよう
に提言を行った。

- ① 言い切り形の基本的機能を説明する必要がある。
- ② 初級段階での「だ。」の言い切りの使用は、慎重にするべきである。中級以降に、相手への反応に使えない点を留意し、「だ。」のその他の用法を導入する。
- ③ 独話的発話の指導を強化する。
- ④ 「(い) やだ。」「ほんと(う)だ。」「と思う。」などの固定的表現を教授するのは有益である。

キーワード：言い切り形、普通体会話、コーパス、話し言葉の文法、
曖昧性

普通体会話言い切り形の教授に関する一考察 —母語話者と学習者の使用状況の分析から—

中村直孝

世新大学日本語学科 助理教授

1. はじめに

「言い切り形¹」とは、終止形で終わり、終助詞や接続助詞などの付加要素を伴わない言語形式のことであるが、学習者の普通体会話を観察すると、時折(1)のような不自然な使用例が見られる。

(1) 学習者発話例 (学習者発話資料 104²)

M01: 夏休みにどこか行く?

M02: 夏休みに、私は…。

M01: カナダ?

M02: 日本に旅行するつもりだ。

M01: 日本のどこか?

「旅行するつもりだ。」と述べた場合、王様のような立場の人物が偉そうに話をしているような印象を受け、不自然な印象を受ける。この場合、「旅行するつもり。」「旅行するつもりだけど。」などが一般的な発話と言えるだろう。また、「旅行するつもりです。」と丁寧体であれば、こうした不自然さは減少してしまい、不自然さを生む原因の一つが普通体会話であることが分かる³。

日本語教育での普通体会話教育を見ると、このような名詞文の言い切りについて、「『だ。』で終わるのは回避し、体言止めや『だよ。』『だね。』などの終助詞をつける」と指導していることが多いようで

¹ 言い切り形は、「裸のダ体」(メイナード 1993; 上原ほか 2004 など)、「動詞等 ϕ 形」(庄山 2014)、「言い切り形」(甲田 2016) などと呼ばれており、詳細な定義は研究者によって若干異なるが、ここではこの概念を表すものを「言い切り形」と呼ぶこととする。

² 学習者が授業中に行った自由会話を書き起こしたもの。4.2 で詳述。

³ 「ここに置いてもいいですか。」という質問に対し、「いいです。」と答えた場合、若干の違和感を感じるように、丁寧体であっても言い切り形が不自然に感じる場合もあるが、本研究では丁寧体の言い切り形については言及しない。

ある。しかし、母語話者発話例(2)のように母語話者による会話での言い切り形で終わる文は、会話全体の1割程度⁴あり、全くないというわけではない。

(2) 母語話者発話例 (名大会話コーパス data009⁵)

F122: 今日は雨が降る前に、自転車に来て。

M006: あ、何時から降り始めたんですか。

F122: 8時一、8時、9時までは降ってなかったですね。

M006: あー、そうなんだ。

F122: うん。今。

M006: 寝てたのがバレバレだ。 <笑い>

学習者にとって、(1)のような発話は不自然だとされるのに、(2)のような母語話者の発話はどうして受容されるのか、学習者が疑問に思うのは自然な事だろう。しかし、この点について、どのような場合に言い切り形が許容されるか、明確な指導はあまりされていないようである。

こうした「言い切り形」に関する研究は、メイナード(1993:81-126)、上原ほか(2004)、黒沢(2010)、庄山(2014)、甲田(2016)、中村(2020)などがあり、言い切り形の性質や用法などについてはある程度の研究がなされているが、学習者への指導方法などについてはあまり確立されていないと考えられる。

本研究では、普通体会話教育において、言い切り形の適切な指導方法を探求したい。具体的には次のような研究を行う。①言い切り形のより現実に即した分類方法を提案する。②学習者の使用例が自然かどうかを判定し、その分析を行う。③母語話者と学習者の発話データを用いて、分類ごとに数量的に調査する。④学習者への具体的な指導法について提案する。

⁴ 調査方法や調査対象などに違いがあるが、母語話者の発話内容で言い切り形が占める割合は、庄山(2014)では21.1%、甲田(2016)では8%、中村(2020)では9.37%とされている。なお、これらの割合には名詞文に加え、動詞文や形容詞文などの言い切り形も含まれる。

⁵ 母語話者の雑談を主とした公開されているコーパス。4.2で詳述。

2. 言い切り形に関する先行研究

ここでは丁寧体を含めた言い切り形に関する先行研究をその分類を中心に概観する。

メイナード（1993:81-126）では、母語話者の友人同士の会話データを分析し、『裸のダ体』⁶は、相手に受け入れられやすいように形成したものではなく、あたかも話者が聞き手に向けて形を整える余裕がなく、又は必要性がなく、思考や経験をそのまま表現した『裸』のままの姿のようであると述べている。

上原ほか（2004）の分類方法と文例を表にまとめると、表1のようになる。

表 1 上原ほか（2004）による分類方法と文例

分類	説明	文例
聞き手に向け ない発話にお ける言い切り 形	独話の類と話者 の回想	A:そこで伺ったら、向こうに自動 販売機があるからって B:あ、あれ？ わたし <u>こっち</u> だ.
聞き手に向け た発話におけ る言い切り形	1) 返答	A:仙台はどれぐらいですか、今. B:8年目に <u>入りました</u> .
	2) 返答以外 話し手の私的な 領域に属する情 報	A:だいたい私はスタンダードから 外れてるんで B:私もはずれてると <u>思います</u>
中間的なもの —共同発話的 なものにおけ る言い切り形	相手の言わんと したと思われる ことを先取りし て述べた発話	A:日本人のくせで先生のしゃべり ってのが付いて回るんですよ B:あ、ありますねー C: <u>あります</u>

⁶ ほぼ本稿の「言い切り形」と同じもの。

その他	1) 従属節の内容を表しているもの	A: 午後の作業って何でしょう. B: 何でしょう. C: 何でしょうね. A: ひどいですね. <u>誰も知らない</u> (笑い)
	2) 適切な叙述内容に言い換えているもの	A: 日本語教師してるとゆっくりになるじゃないですか. B: なんか、ゆっくりというよりは、はっきりと C: 言い切る. A: 文法的すぎる. <u>むにやむにやって</u> <u>言わない</u> .

黒沢 (2010) は名大会話コーパスの「だ」「です」を抽出し、言い切り形の文末、助詞付きの文末を数量的に比較したところ、いずれも言い切り形の文末は助詞付き文末より少なく、「だ」の言い切り形は 24%、助詞付きは 76%であり、「です」の言い切り形は 21%、助詞付きは 79%だったという。「だ」の言い切り形の割合が、「です」より多かったことについて、広義の独話や聞き手を意識しない発話の用法があるからだとしている。

庄山 (2014) では、言い切りを①要求・応答、②思い出し・気づき・初耳・驚き、③同調・共作、④眼前描写・回想、⑥推測 (助動詞的)、⑦強調 (各種形式)、⑧丁寧、⑨その他 (単純判叙文) に分類し、母語話者、学習者の発話をそれぞれの用法を数量的に計測している。

甲田 (2016) では、母語話者の対面会話 (8 時間 34 分) の会話資料から言い切り形が使われる文脈環境について分析し、分類方法を示している。甲田 (2016) で示している分類と文例を表にまとめると、表 2 のようになる。

表 2 甲田（2016）による言い切り形の分類と文例

分類		説明	文例
A 単体 (文脈上、独立しているもの)	A1)自己完結しているもの	聞き手との関係の中で情報の価値が決まるのではなく、単に情報を提示している。	A:実はね、わたしもやってんだけど、学習塾 B:はい A:今ね、 <u>社会もたされてる</u> 。 <u>なぜか国語が来ない</u>
	A2)現場で生じた感情や反応	自らの感情をとっさに発したものの。	A:3年時、理系クラスだったから B: <u>かっこい</u>
B 接続関係後半部 (隣接する相手の発話に後続するもの)	B1)質問—応答	質問に対する応答。	A:あまりない？ B:まだまだ <u>少ない</u>
	B2)同意・不同意	直前の前件にすぐ反応する手段として使われる。	A:関西系のノリだな B:いや、 <u>関西関係ない</u>
	B3)リサイクル	直前の発話を繰り返すことで、いったん相手の発話を受領し、了解を表す。	A:ノンフィクションとかそういうのはあんまり読まない B:あ、 <u>読まない</u>
	B4)相手発話の補完	相手の発話を補完する。	A:なんかね、最初は場をね B: <u>盛り上げるためにやった</u>
	B5)言い直し	直前の発話を言い直す。	A:岩波って、ま絶版っていうか。版が B:もう消えてる A: <u>切れてる</u>

分類	説明	文例
C連鎖終結部 (連続する自らの発話の終結部に位置するもの)	一定の長さ継続した発話の終結をマークしており、自らの発話を言い切ったことを明示し、相手に発話ターンを譲渡するサインとして機能している。	B:もみじ饅頭は広島のだ こでも売ってるよ C:そう. いや宮島でわざわざ買って B:かわんなくねえ? C:持って帰って、渡すの忘れて、冷蔵庫に入れてたの A:うん C:そしたら、カビ生えてた

甲田（2016）は、文脈という広い視野から言い切り形の用法を観察した点において重要な指摘をしており、本研究の基礎となっている。しかし、普通体会話での言い切り形を学習者に提示するには次のような課題があると考えられる。

第一に文種による差異を考慮していない点である。例えば、表2のB1質問—応答の用法について、名詞・な形容詞文、い形容詞文、動詞文それぞれを、表3のように検討してみると、明らかに名詞・な形容詞文の「だ。」を使った言い切り形は、い形容詞文、動詞文と異質であることがわかる。名詞・な形容詞文の言い切り形の「だ。」は質問に対する応答では使いにくいのに対し、動詞文とい形容詞文では、言い切り形で答えても自然に聞こえる。また、い形容詞文は物事の状態や感情を表現することが多く、感情を表出する際に多く使われることが予想され、名詞・な形容詞文あるいは動詞文とは違う使い方を多くされていると予想される。このように、普通体会話の文末表現における文種による分類は、学習者に提示する際に、大きなヒントとなる可能性を持っており、有効な方法だと考えられる。

表 3 品詞別による B1「質問—応答」の作例

品詞	作例
名詞・な 形容詞文	A：鈴木さん、元気？ B：??うん、元気だ。
い形容詞 文	A：これ、おいしい？ B：うん、おいしい。
動詞文	A：今日、行く？ B：うん、行く。

第二に、表 2 で提示した「A1 単体」について、甲田 (2016) では、「情報や思いつきを特定の聞き手へ向けないかのような形で提示するもの」であり、敢えて言い切り形を使うことで、「素材的に」物事を提示する機能だと述べている。しかし、学習者にとっては「特定の聞き手へ向けないような形」とは何を指しているのか、理解しにくいと考えられる。学習者に提示する際には、学習者の目線で受け入れられる名称、説明を考慮するべきだろう。

中村 (2020: 94-98) では、言い切り形を母語話者と学習者の発話データから抽出し数量的な調査を行っている。しかし、学習者による普通体会話の文末形式全体の研究の一部であり、十分に考察されているとは言い難い。特に学習者にどのように言い切り形を導入すべきかについては言及が不十分である。なお、本研究は中村 (2020) とほぼ同じデータを使用し、手法も類似している。

本稿では、以上のような先行研究を踏まえ、言い切りの用法の分類を試み、その結果を使ってそれぞれの量的な分析を行うが、その際、岡崎 (2018) による分類を援用する。岡崎 (2018) では、Cook (2002) などを発展させ、一見同じように見える普通体を情報焦点型、聞き手目当て型、独話的発話⁷の 3 つに分類している。その定義と特徴は表 4 のようにまとめられる。

⁷ 岡崎 (2018) では、Cook (2002) に従って、普通体を IP (impersonal)、IF (informal)、独話的発話の 3 つに分類しているが、ここでは奥西 (2019) の用語を用い、情報焦点型、聞き手目当て型、独話的発話とする。

表 4 岡崎（2018）による分類の定義と特徴

分類 性質	定義	言い切り形における特徴
情報焦点型 情意的態度－ 聞き手目当て 性－	聞き手に対する意識が希薄であり、話し手の意識が発話の情報内容へ向けられていることが指標される普通体発話	モダリティ要素等により話し手の情意的態度が表示されておらず、聞き手目当ての発話ではないとき
独話的発話 情意的態度＋ 聞き手目当て 性－	聞き手不在であるかのように発話され、思考や心情が素直に表出されることにより、話者間の心理的距離を短縮される普通体発話	率直な感情を表出するとき 自己訂正を行うとき 冗談の文脈で、相手の発話を繰り返すとき
聞き手目当て型 情意的態度＋ 聞き手目当て 性＋	聞き手に対して強く意識が向けられており、且つ、聞き手と親しい関係、心理的に近い関係であることが指標される普通体発話	質問に対する答えとして用いられたとき

3. 言い切りの用法分類

ここでは言い切り形の用法を、(A)帰結、(B)展開、(C)見解の表明、(D)宣言、(E)相手への反応、(F)発見、(G)感情の表出、の7つの用法に分類し、その詳細を述べる。これらの分類は、名大会話コーパス⁸で出現した普通体会話での言い切り形を先行研究での分類に当てはめ、さらに細分化や統合を行うことで整理したものである。ここでは名大会話コーパスの用例を使って解説を試みる。

⁸ 名大会話コーパスについては「4.2 分析データ」で詳細を述べる。

(A)帰結：

ある文脈や状況の帰結やまとめを述べるために、言い切り形を使用している用法⁹。話し手の意識は、発話の情報内容に向けられていることから、情報焦点型と考えられる。すべてではないが、「つまり」「やっぱり」「じゃ」などが付加できることが多い。

(3) 母語話者発話例（名大会話コーパス data099）

（正規料金の7万円の電話加入権を買うか、或いは、リスクの高い個人業者から1万5000円の電話加入権を購入するかを、二人で検討している。）

F037：実際は、7万で買って、で、それから、月々の電話代を払うから、やっぱ1万5000円だ。
1万5000円の、うーん。

F067：リスクを冒すか。

(3)の例では、討論した結果、7万円を払って、さらに月々の電話代を負担を払うのは、負担が大きすぎるので、リスクの高い「1万5000円」の電話加入権を買うという決心を、言い切り形を使用して話の帰結や結論として示している。

(B)展開：

ある文脈や状況を受けて、次に来る進展状況を注目すべき事柄として述べる用法。(A) 帰結の用法では、前提となる部分と言い切り形の部分には因果関係があるが、この用法では前件と後件の関係性は低い。ただ、次の展開が注目すべきことであることを言い切り形で表している。順接的な展開であれば、文頭に「それから」「それで」「しかも」などがつけられ、逆接的な展開であれば「だけど」などがつけられる。この用法も情報焦点型に分類される。

(4) 母語話者発話例（名大会話コーパス data077）

F092：この人、あの、この人、今、P薬局でお仕事し

⁹ 後述の(B)見解の表明や、(D)行動の宣言の大部分もこの帰結の一種とも言えるが、本稿では(B)見解の表明や(D)行動の宣言以外のものを(A)帰結とした。

てる。＜中略＞エステに就職したんだけど、なんかよくなかったらしくて、会社が。＜中略＞で、やめて、今、薬局にいるからね、行くとい
るんだって。

F073：あそこのP薬局？

F092：うん、でね、なんか試供品くれる。

F073：あっ、よかったね。

(5) 母語話者発話例（名大会話コーパス data105）

F001：やっぱ、猫とか犬くらいこう感情表現してくれないとー。

F048：うん、うんうん。張り合いがないよねえ。

＜中略＞

F001：こっちに気付いてるかどうかもわかんないじゃん、ウサギとかって。たぶん気付いてんだらうけど。一応こうコミュニケーションしたいよね。

F048：あーペット飼いたいな。でも世話をする自信がない。部屋の中も汚いし。

(4)の例では、知人がP薬局で勤務していることについて述べ、さらに F092 が言おうとしている話の重点である「試供品をくれる」を言い切り形で述べている。(5)は逆接的な展開の例で、ペットを飼いたいという要望を伝えつつも、次に、自分に世話をする自信がないという問題が思い起こされ、それを言い切り形で言うことで、展開として大きな問題であることを表している。

(C)見解の表明：

ある文脈を受けて、それに対する見解や感想などを、しめくくりとして述べる用法。「と思う。」「のような気がする。」などの表現を用いられることが多い。後述の(G)感情の表出のように現場で生まれた新しい感情を直接的に述べるのではなく、あらためて理性的に見解を述べた場合がこの用法となる。相手に自分の見解を伝えようとしており、「と思う」のようなモダリティ標識がある表

現を使っているという点から、聞き手目当て型に分類される。

(6) 母語話者発話例 (名大会話コーパス data125)

F134 : きっとそうだ。それに比べて、本州本土の人々は、きっとあれだよ。内地の人々は、こういうふうに言うんだよ。結婚、離婚しようと思うけど、結婚式高かったからなあ。

F112 : ああ、でもそれ、なんか、たぶん、あれはあると思う。

(6)では、北海道の離婚率が高いことについて、結婚式にかかる費用が比較的安いことが原因だと、F134が冗談として述べているが、それに対して、F112は「でもそれ、なんか、たぶん」と若干言いよどみながら、自分の思考をまとめ、「あれはあると思う。」と言い切り形で自らの見解を述べている。

(D)相手への反応 :

相手側の発話に後続する用法。甲田(2016)では反応をさらに、質問一応答、同意・不同意、リサイクル、相手発話の補完、言い直しなどが挙げられているが、明確に分類できないものも多く、ここでは「相手への反応」としてまとめる。この用法は、相手に向けた発話であるので、聞き手目当て型とされる。

(7)では「走ろっか。」というF092の誘いに対して、F073が「走る。」と応答している。

(7) 母語話者発話例 (名大会話コーパス data077)

F092 : 一緒にやせよう。ダイエットしよう。走ろっか。

F073 : 走る。夜走るか？

F092 : うん、川沿い。

(E)宣言 :

確定している事項を宣言する用法。予定行動を宣言する場合と、何かを陳述する場合の二つがあり、いずれも聞き手に直接訴えかける聞き手目当て型である。(D)反応では、「行く？…うん、行く行く。」のように畳語になることがあるが、宣言する用法では畳語

になることはない。また、陳述する場合は「(ドア越しに) わたしだ。開けてくれ。」のように、男性的で威厳を示すような言い方である。このような男性的な話し方はあまり使われなくなっているようだが、冗談など、技巧的に使われる場面も想定される。

(8)では、M033はコンビニに行くことをF001に宣言している。

(8) 母語話者発話例 (名大会話コーパス data046)

M033: あーあ。腹減ったなあ。

F001: なんか食べれば。

M033: なんもねえだろうがよ。あー、コンビニ行って
なんか買ってくりゃよかった。ちょ、コンビニ
行ってくる。

(F)発見:

新しく何かに気づいた場合、何かを思い出した場合、相手の発話から新しい発見があった場合など、新しい認識について独話的に驚きや納得の気持ちを持って述べる用法。新しい発見の場合は、「あっ」がつけることができ、思い出した場合は「確か」「確かに」などがつけられる。自らの驚きをそのまま表現しているような用法であり、独話型発話に分類される。

(9)ではマリノという車種について話しているが、M057はレビンの次に出た車種だということを思い出し再確認することで、納得している様子が伺える。

(9) 母語話者発話例 (名大会話コーパス data045)

F036: これねー、マリノ。

F057: え?

F036: マリノ。

F057: マリノ、あ、そうかそうか。レビンの次に出た
やつだ。

(G)感情の表出:

その場で生まれた感情を、そのまま素直な感情を独話的に表出する用法。(C)見解の表明より衝動的で、その場で生まれた感情を

そのまま口にするような様式であり、独話的発話に分類される。

(10)では、F086 がアルバイト先のパンを F046 に提供しようと言っており、F046 がそのことに対し素直に喜びを口に出している。

(10) 母語話者発話例（名大会話コーパス data072）

F086：あっ、パン、F046 にあげたことないよね？

F046：ない、ない。

F086：あっ、持ってくる、明日。＜中略＞学校ある？

F046：うん、来てる来てる。

F086：えー、じゃ、渡そうかなー。あるよ。

F046：うそ。ほんと？超うれしい。

以上述べた分類を、岡崎（2018）での分類と、甲田（2016）での分類とで比較すると表5のようになる。

表 5 先行研究での分類との比較

本稿での分類	岡崎（2018）での分類	甲田（2016）での分類
(A)帰結	情報焦点型	A1)自己完結しているもの
(B)展開	情報焦点型	A1)自己完結しているもの
(C)見解の表明	聞き手目当て型	A1)自己完結しているもの
(D)相手への反応	聞き手目当て型	B1)質問一応答 B2)同意・不同意 B3)リサイクル B4)相手発話の補完 B5)言い直し
(E)宣言	聞き手目当て型	A1)自己完結しているもの
(F)発見	独話的発話	A1)自己完結しているもの
(G)感情の表出	独話的発話	A2)現場で生じた感情や反応

情報焦点型と聞き手目当て型に分類された(A)～(E)に分類される

言い切り形は同系統の用法で、これらの根本的な機能は、発話連鎖に結論としての「オチ」をつけることではないかと考えられる。つまり、ある話題、状況、問いかけ、考慮を受けて、その結論としての帰結、展開、見解、反応、考慮結果などを話者が述べる際の標識として機能していると考えられる。甲田（2016）では、言い切り形が現れる文脈環境の一つとして、「連続する自らの発話の終結部」を挙げているが、結論を述べていることから、結果的に発話の終結部になることが多くなると考えられる。

4. 調査方法

4.1. 調査の概略

本研究では、普通体会話教育における言い切り形の適切な指導方法を探求するために、二つの調査で母語話者と学習者の使用状況を明らかにしたい。学習者言い切り形の正誤判定調査〈調査1〉では、学習者が自由会話で発話した内容の中から言い切り形を抽出し、それが自然かどうかを複数の母語話者が判定する。言い切り形の用法分類調査〈調査2〉では、母語話者と学習者は言い切り体をどのように使っているのか、用法分類ごとに量的調査を行う。

4.2. 分析データ

ここでは、使用する母語話者と学習者の発話資料について詳細を述べる。

日本語母語話者の発話資料として、名大会話コーパス¹⁰を使用する。名大会話コーパスは129会話、合計約100時間の日本語母語話者の雑談を文字化したデータであり、会話参加者は女性161名、男性37名で、年代は10代から90代までにわたっている。

名大会話コーパスの多くは普通体会話だが、丁寧体の部分も存在する。本調査は普通体会話を研究対象としていることから、普通体のみで発話されている発話ターンの部分を使用することとする。さらに、比較対象の学習者発話資料の話者はすべて大学生であることから、名大会話コーパスも10代後半、20代前半、20代後半の

¹⁰ 詳細については、藤村・大曾・大島ディヴィッド（2011）を参照。

発話部分（女性 80 名、男性 20 名）のみを使用することとした。

次に学習者発話資料は、台湾の大学日本語学科 2 年生の会話授業（「日語會話」）で行った普通体会話の自由会話の録音記録を文字化したものを使用する。調査対象者は 19 歳から 22 歳までの女性 20 名、男性 15 名である。学習歴は 1 年 3 か月から 5 年まで幅広く、同じ授業の履修者ではあるが、学習者の日本語能力は若干の差がある。当該授業は主教材として『文化初級日本語 3 改訂版』を用いており、第 24 課で普通体会話におけるジェンダーの差異や疑問の「か」の不使用など普通体会話の基本的な項目は履修済みである。自由会話はランダムに組まれたペアで行い、「高校の友達とよく連絡している？」「もうすぐ中間試験だね。」など指定された話始めの言葉から会話を始めるように指示した¹¹。一つの会話は 2～3 分で終了させ、会話中に、話題を転換することも許可している。会話の収録は、2 年（民国 106 学年度第二学期 2018 年 2 月～6 月、民国 107 学年度第二学期 2019 年 2 月～6 月）の二つのクラスにまたがっており、調査に同意しなかった学習者が含まれる会話データは使用しなかった。

分析データは、「あー。」「うん。」などの単独の感動詞、フィラーの文が多く含まれていたため、文末から前方に 1～2 語目が感動詞であるものは文として認定せず、削除した。その結果、名大会話コーパスの文の総数は 56281 文、学習者発話資料 1392 文となった。

4.3. 言い切り形の定義

まず、言い切り形の定義を明確にしたい。

言い切り形とは、終止形で終わり、終助詞や接続助詞などの付加要素を伴わない言語形式を指すが、研究者によってその詳細は若干異なる。本稿では、甲田（2016）や上原ほか（2004）に従って、次のように定義する。

言い切り形は、動詞、い形容詞、な形容詞の終止形で終わっているもの、或いは動詞、い形容詞、な形容詞、名詞に付加される過

¹¹ なお、話始めの指定された言葉は今回の調査対象とはしなかった。

去・否定・丁寧¹²・アスペクトなどの働きを持つ助動詞で終わっているものとする。しかし、①上昇調のイントネーションを伴い、質問を表すもの¹³、②挨拶のような定型句のもの、③「のだ」文¹⁴、④命令文¹⁵、は性質が他の言い切り形とは異なると判断し、言い切り形とは見なさない。

4.4. 研究対象の範囲

表 6 母語話者と学習者の言い切り形出現の比較

種別	言い切りの形式	母語話者		学習者	
		頻度	%*	頻度	%*
名詞・ な形容 詞	～だ。	402	0.71	25	1.8
	～じゃない。	127	0.23	9	0.65
	～だった。	111	0.2	1	0.07
	～じゃなかった。	9	0.02	0	0
い形容 詞	～い。	1537	2.73	35	2.51
	～くない。	27	0.05	0	0
	～かった。	229	0.41	1	0.07
	～くなかった。	2	0	0	0
動詞	～る。	1837	3.26	107	7.69
	～ない。	127	0.23	33	2.37
	～た。	803	1.43	53	3.81
	～なかった。	61	0.11	3	0.22
合計		5272	9.37	267	19.18

*「%」は、普通体会話全発話文に占める割合を示す。

表 6 は、本調査の研究対象となる名大会話コーパスと学習者発話資料の言い切り形の数量調査で、文種と肯定・否定、非過去・過去

¹² 本研究では研究対象を普通体会話としていることから、丁寧「です」の助動詞は取り扱わない。

¹³ 上昇調のイントネーションが付くことで、実質疑問を表す終助詞「か」が付加されているのと同義であるため。

¹⁴ 甲田（2016）では「のだ」文は文脈上の関連や主張を表すため、言い切りとは性質が異なると述べている

¹⁵ 「さっさと歩く！」「さあ、買った買った！」（甲田（2016）の作例）などがこれに当たる。本稿での調査では、命令で用いられている例はなかった。

② 起点より 1 語前が動詞の終止形のもの¹⁶、い形容詞の終止形のもの¹⁷、終助詞終止形「だ(一)」で終わり直前が名詞やな形容詞などのもの¹⁸。

4.5.2. 学習者発話の正誤判定調査<調査 1>の手順

前項のように学習者発話資料から言い切り形を抽出し、その言い切り形 167 例の前後を観察した。それらの会話には意味が掴みにくい物などが含まれていたためそれらを除外したところ、123 例の用例(名詞・な形容詞文 22 例、い形容詞文 21 例、動詞文 80 例)が得られた。言い切り形の前後の文脈が分かる会話を日本語母語話者 7 人に提示し、赤で示した言い切り形の部分が言い切り形として、① 自然、② どちらとも言えない、③ 不自然、④ 話の流れが分からず、判別できない、の 4 つの選択肢から一つ選ぶよう依頼した。

4.5.3. 学習者・母語話者の用法分類調査<調査 2>の手順

母語話者、学習者の発話資料で抽出された言い切り形がどの言い切りの用法分類に当てはまるのか頻度調査を行う。

母語話者については、名大会話コーパスに現れた言い切りの用例から、名詞・な形容詞文、い形容詞文、動詞文の三つの項目それぞれ 50 例ずつを無作為に抽出し、(A)帰結、(B)展開、(C)見解の表明、(D)相手への反応、(E)宣言、(F)発見、(G)感情の表出、のいずれに該当するのか、当該言い切り形の前後の会話の内容から判断し、分類・集計を行った。なお、一つの用法に二つ以上の解釈ができるものがあったとしても、より強くその特徴を持つと考えられる分類を一つだけ選ぶこととした¹⁹。

¹⁶ UniDic の用語を用いて詳細に述べれば、次の通りである。起点より 1 語前が [動詞-一般 or 非自立可能-終止形] であるもの。

¹⁷ 起点より 1 語前が [形容詞-一般 or 非自立可能-終止形] で、「ではない」や「(形容詞連用形) くない」などを除外したもの。

¹⁸ 起点より 2 語前が、[名詞 or 形状詞 or 代名詞 or 接尾辞-名詞的 or 接尾辞-形状詞的 or 副詞] であり、起点より 1 語前が [助動詞-終止形-一般「だ」] であるもの。

¹⁹ 特に、多くの例が (D) 相手への反応とその他の用法と重複しているが、具体的な質問に対する答えの場合は、(D) 相手への反応とし、それ以外の場合は、重複したもう一つの用法として分類した。

学習者言い切り形の用例については、〈調査1〉で自然と認定されたものすべてを対象に、同様の方法で分類を行うものとする。

5. 調査結果

5.1. 学習者言い切り形の正誤判定調査〈調査1〉

母語話者の判定者7人が123例の例文について判定を行ったが、そのうち7人すべての答えが一致した例文は18例(14.63%)と非常に少なかった。

次に、それぞれの言い切りの使用について、7人の母語話者のうち5人以上が「自然」を選んだものを「自然」と認定し、同様に5人以上が「不自然」を選んだ場合「不自然」とした。さらに「自然」、「不自然」ともに5人に達していないものは「不一致」として、集計を行ったところ、表7のような結果が得られた。

表7 学習者言い切り形の正誤判定

	自然		不自然		不一致		合計	
	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%
名詞・な形容詞文	0	0	21	95.5	1	4.5	22	100
い形容詞文	9	42.9	1	4.8	11	52.4	21	100
動詞文	24	30	6	7.5	50	62.5	80	100

まず、注目されるのは、名詞・な形容詞文の項目は自然だとされたものは皆無で、ほとんどが不自然と認定されたことであろう。それに対し、い形容詞文や動詞文については、自然とされたものは半数に達していなかったものの、不自然と認定されたものは1割未満であった。

5.2. 言い切り形の用法分類調査〈調査2〉

母語話者、学習者の発話資料で抽出された言い切り形がどの用法分類に当てはまるのか調査を行ったところ、表8のような結果が得られた。

表8 言い切り形使用の用法分類

	名詞・ な形容詞文	い形容詞文	動詞文

	母語話者		母語話者		学習者		母語話者		学習者	
	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%
(A)帰結	11	22	4	8	0	0	8	16	0	0
(B)展開	0	0	9	18	1	11.1	11	22	4	16.7
(C)見解の表明	0	0	11	22	1	11.1	16	32	10	41.7
(D)相手への反応	0	0	6	12	1	11.1	10	20	7	29.2
(E)宣言	0	0	0	0	0	0	3	6	2	8.3
(F)発見	24	48	1	2	0	0	2	4	0	0
(G)感情の表出	15	30	19	38	6	66.7	0	0	1	4.2
合計	50	100	50	100	9	100	50	100	24	100

まず、母語話者の部分から観察する。

名詞・な形容詞文は、い形容詞文、動詞文と違い、(B)展開、(C)見解の表明、(D)相手への反応、(E)宣言の項目は全く出現がなかった。また、名詞・な形容詞文は、(F)発見、(G)感情の表出が非常に多く、(F)発見の24例のうち、7例は「ホントだ。」に類するものであり、固定的な表現が目立った。また、名詞・な形容詞文の(G)感情の表出のは14例だったが、そのうち11例が「(い)やだ。」に類するもので、同様に固定的な表現が多く見られた。

い形容詞文は元々状態、様子、属性を表すものであり、(C)見解の表明や(G)感情の表出が多くなるのは当然であるが、(A)帰結、(B)展開、(D)相手への反応なども一定数見られた。

動詞文は(G)感情の表出には一例も見られなかったが、それ以外すべての分類に用例が見られた。特に(C)見解の表明が32例と最も多く、「～と思う。」(5例)、「～気(感じ)がする。」(5例)など固定的な表現が目立った。

次に学習者の部分を観察する。

学習者の名詞・な形容詞文は自然と判別されたものがなかったの
で、用法分類はできなかった。

い形容詞文では、母語話者と同様に、(G)感情の表出の用法が比

較的多く見られた。その他の用法については頻度が 1 例だけであり、比較検討するには数量が十分ではないと考えられる。

動詞文では母語話者と同様の傾向があるように見えるが、学習者の頻度数が少ないことから、詳細を検討することはできなかった。

6. 考察

調査結果から「だ。」の特殊性、言い切り形の曖昧性について考察し、日本語教育への提言を行う。

6.1. 「だ。」の特殊性

本研究では(C)見解の表明、(D)相手への反応、(E)宣言の三つを聞き手目当て型に分類したが、母語話者はこの 3 つの用法では「だ。」を使用していない。「だ。」は聞き手目当て型の用法は使いにくい性質を持っているようだ²⁰。こうした点から、「だ。」の会話での使用は特に相手の意図に無配慮なニュアンスを含んでおり、他の言い切り形とは若干違った特殊性を持っているようである。つまり、い形容詞文や動詞文での言い切り形は、聞き手目当て型を使用できるが、「だ。」はその特殊性から、聞き手目当て型には使用が非常に難しいと考えられる。

学習者の名詞・な形容詞文で不自然と判定された 21 例のうち 20 例は、「だ。」をつけず、名詞やな形容詞で終わる形にすれば、自然と考えられるようなものであった。また、不自然と判定された 21 例の中には(11)のような(D)相手発話への反応に分類されるような例が 3 例あり、い形容詞や動詞の例のように、質問の返事であれば、言い切り形が使えると誤解している可能性もある。

(11) 学習者発話資料 A014

F18: いや、行ったほうが良いと思うよ。

F19: でも、やっぱり病院が怖いだもん。

F18: でも、もしなんか大変な病気になったら、どうする？

²⁰ (E)宣言の用法説明の箇所、「わたしだ。開けてくれ」という例を既に挙げており、使用は可能であるし、(C)見解の表明、(D)相手への反応でも「だ」の使用は可能かもしれない。しかし、使用の頻度は少なく、一般的ではないと考えられる。

F19：そのまま自殺するつもりだ。

F18：そんなの**だめ**。

こうした学習者の言い切り形の不自然さの一部は「だ。」の特殊性を学習者が理解していなかったことから来るものと言えるだろう。

6.2. 言い切り形の曖昧性

学習者言い切り形の正誤判定調査<調査1>では、母語話者の判定者7人全員の答えが完全に一致した例文は約15%と非常に少なかった。また、7人の判定者の選択の一致が5人に達せず、「不一致」とされたものは、名詞・な形容詞文で約5%、い形容詞文で約52%、動詞文で約63%にのぼり、ある言い切り形が自然なのかどうかの判断が母語話者にとっても難しいということが明らかになった。

用例を元に、このような結果になった原因を考察してみたい。

(12) 学習者発話資料 G026

M18：まだ早いけど、もう死ぬから今から中山に行く。

中山でたくさんおいしい店がある。例えば、日本料理とかしゃぶしゃぶとか。ラーメン屋もたくさんある。一緒に行かない？

M15：一緒に行こう。でも、X（店名）の店はちょっと高い。

M18：そうだよ。まあ、300元だね。

(12)の例は、7人の母語話者のうち、3人が「自然」と判定し、2人が「不自然」、2人が「どちらとも言えない」を選択し、最終的に不一致とされた例である。なお、店名「X」はM15、M18の双方、既知と考えられるが、この部分以前には出現していない。

まず、自然だと判断した理由を考えてみたい。この会話での言い切り形の分類は(B)展開や(C)見解の表明ということになるだろう。食事に行くという会話の流れの中で、双方の暗黙の了解のもとによく行く「X」について、行くかどうかを決める過程の中で注目すべき事項や見解として、「ちょっと高い。」と述べているという解釈がなりたち、言い切り形の使用が肯定される。

次に不自然だと判断した場合について、理由を考えてみる。会話の流れから「X」は双方に既知であっても、既に様々な店が提案されており、「X」に行くという了解はない。したがって、少なくとも「Xの店は少し高いんだよね。」など、相手への配慮としての聞き手目当ての追加的表現が必要であり、言い切り形は不自然と言うこともできるだろう。

甲田（2016）が述べているように言い切り形の出現は文脈依頼であり、(12)のように、文脈や発言者の意図の解釈によって容易に自然とも不自然とも判断される例が多く生まれてしまう。つまり、言い切り形の用法は曖昧性が非常に高い文法事項だと言える。

続いて、不自然とされた用例について、検討してみたい。(13)は7人のうち6人の母語話者が不自然であると判定した用例である。

(13) 学習者発話資料 K010

F03：そうだね。私はたくさん単語を覚えなくちゃだめと
思ってる。

F04：そうね。文法も

F03：文法も複雑。うん。

F04：3年生になったら、担任の先生は変わる。

F03：そうだね。えっ。3年生の文法の授業は、F04さんは選ぶ？

(13)が不自然だとどのように学習者に説明すればいいだろうか。例えば、本研究で提案した(A)帰結～(G)感情の表出のどれにも該当しないと言う説明も一つの方法かもしれない。しかし、担任の先生が変わることを長く意識していた F04 が話の流れを受けて、ついに口に出した発言だと学習者が主張した場合、(B)展開と捉えることも可能である。そうでなくても、(F)発見などの独話的表現だと主張されれば、この用例は許容できると言わざるを得ない。母語話者7人のうち6人が不自然だと判定した例であっても、完全に間違いであるとは言いにくいのである。

以上のように、言い切り形は、自然か不自然かを判定するのは困

難が伴う。また、たとえ多くの聴者が不自然に感じた用例であっても、発話者に言い切り形の用法に沿った意図があれば、誤用とは言えず、間違いを指摘することも難しいと考えられる。

6.3. 日本語教育への提言

ここでは、得られた知見から、言い切り形の具体的な教授方法について述べる。

6.3.1. 言い切り形の基本的機能の指導

言い切り形の曖昧性と教授の困難性を指摘したが、言い切り形自体に文法的な役割があるのは確かであり、その教授は必要である。本研究では言い切り形の用法として、(A)帰結～(G)感情の表出の7つに分類したが、このままでは学習者にとっては分かりにくく、また普通体会話の指導する時間が短い現状を考慮すると、より簡素に述べる必要があるだろう。ここでは普通体会話の言い切り形の機能を次の3つに分類し提示することを提案する。

① 結論を述べる

(A)帰結、(B)展開、(C)見解の表明、(D)相手への反応、(E)宣言がこの機能に該当する。なんらかの主題で会話、状況、思考が進行したのを受けて、その結論として断定的に言い切り形を使って述べる場合の用法である。

② 質問や見解など、相手の発言に対する反応

(C)見解の表明、(D)相手への反応がこれに該当する。①の結論を述べる機能と重複するが、形態的に分かりやすい用法であり、学習者にとっては理解しやすいと考えられる。

③ 独り言モード

(F)発見、(G)感情の表出がこれに該当する。相手に聞かせるための独り言を独特な形式で表現する概念は中国語にはないようだが、独り言の概念なら当然学習者は持っており、実際の使用はともかくその位置づけは比較的理解しやすいと考えられる。

6.3.2. 「だ。」の扱い

学習者に出現した名詞・な形容詞文の「だ。」のほとんどが不自然

と判断され、この事項の難しさが明らかになった。このことから、初級の段階では「だ。」で終わる形の提出には慎重であるべきである。特に、相手への反応の用法では「だ。」は使えないのを明言しなければならない。文化初級日本語（文化外国語専門学校日本語科著）やみんなの日本語初級（スリーエーネットワーク著）などの初級教科書では、名詞・な形容詞文を使った会話練習では「だ。」で終わらないよう指導しているが、これは理にかなった指導法だと考えられる。

その一方で、母語話者は実際に「だ。」を使っており、中級以降では「とりあえず使わなければいい」とばかり説明することはできない。しかし、その場合でも相手への反応には使えない点に留意しながら、(F)発見、(G)感情の表出、(A)帰結などの用法を導入していく必要があるだろう。

6.3.3. 独話的発話の指導

(F)発見や(G)感情の表出の独話的発話の用法の項目について、い形容詞文や動詞文では、母語話者と学習者の使用は大きな差はなかったが、名詞・な形容詞文では母語話者発話の8割近くが独話的発話で占められていたのに対し、学習者では自然、不自然、不一致ともに独話的発話は全く見られなかった。こうしたことから、特に名詞・な形容詞文の独話的発話の補充が学習者の表現を広げる重要な方法となるはずである。また、独話的発話は丁寧体基調の会話でも普通体で述べることから、使用範囲の広い表現でありその重要性は高い。

6.3.4. 固定的表現の利用

母語話者の言い切り形では、頻度の多い固定的表現がいくつか見られた。「(い)やだ。」「ほんと(う)だ。」「だめだ。」などが多く出現しており、(F)発見や(G)感情の表出を導入するのに有効に使うことができると考えられる。また、「～と思う。」「～気(感じ)がする。」などの(C)見解の表明も固定的表現が多く見られ、利用できるだろう。学習者にとってもよく耳に入るこうした決まった言い方を利用する

ことは、現実の言い切り形の使用とその理解を結びつけるのに役に立つだと考えられる。

7. おわりに

語学には教えにくい、学びにくい項目というものが存在しており、普通体会話の言い切り形はその最たるものだろう。さらに、普通体会話という優先順序の低い分野で使われるものであり、現状では注目されるものではない。しかし、中村（2017）では、普通体会話の習得を学習者、教師ともに重視しており、その重要性も今後増していくと主張している。普通体会話の学習には必ず言い切り形についても言及しなければならず、中村（2017）の主張が正しければ、学習者と教師は言い切り形の学びにくさに直面しなければならなくなるだろう。特に、台湾のようにインプットは非常に多くてもアウトプットが少ない環境では、こうした話し言葉の文法の問題点をより明確に捉えることが学習者にとっての利益になるのではないだろうか。

今回の研究では、母語話者言い切り形の語学的な理解を深め、学習者の現状分析を行った。さらに、それらの結果からどのように導入するのが効率的なのかについても提言を行うことで、言い切り形の教授に関して一定の貢献ができたと考えられる。しかし、研究対象を広げる余地は大きく、分類の方法なども修正できる箇所は多いと考えられ、研究の精密化を今後の課題としたい。

参考文献

- 岡崎 渉、2018、「非デスマス形の機能による分類方法の検討：情意的態度と聞き手目当て性の観点から」、『兵庫教育大学研究紀要』、52、兵庫、兵庫教育大学、19-31。
- 奥西麻衣子、2019、「同級生の日本語母語話者との会話に見られる留学生の普通体使用一言語社会化の観点から一」、『日本語教育』、172、東京、日本語教育学会、134-148。
- 甲田直美、2016、「「言い切り形」が生じる文脈環境」、『東北大学文

- 学研究科研究年報』、65、仙台、130-106。
- 黒沢晶子、2010、「名大会話コーパス」に現れた文末形式：普通体と丁寧体に違いはあるのか」、『山形大学留学生教育と研究』、2、山形、山形大学国際センター、3-11。
- 庄山建一、2014、「会話における日本語学習者の文末表現 -文末表現の種類別出現率と習熟度との関連-」、『千葉大学人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書』、278、千葉、千葉大学、57-72。
- 上原聡・福島悦子、2004、「自然談話における「裸の文末形式」の機能と用法」、『日本語教育論集世界の日本語教育』、14、東京、国際交流基金日本語事業部、109-23。
- 泉子・K・メイナード、1993、『日英語対照研究シリーズ (2)会話分析』、東京、くろしお出版。
- 中村直孝、2017、「普通体会話教育に対する学習者・教師の意識調査 -A大学日本語学科を調査対象に-」、『台湾日語教育學報』、28、台北、台湾日語教育學會、001-24。
- 中村直孝、2020、『JFL における普通体会話教育の研究』、東吳大學2020年度博士論文、台北、東吳大學。
- 藤村逸子・大曾美恵子・大島ディヴィッド義和、2011、「会話コーパスの構築によるコミュニケーション研究」、藤村逸子、滝沢直宏編『言語研究の技法：データの収集と分析』、東京、ひつじ書房、43-72。
- Cook, Haruko Minegishi、2002、The social meanings of the Japanese plain form、*Japanese/Korean Linguistics*、Vol.10、Stanford、Stanford University、CSLI Publications、150-163。